

Philip Campbell は、委員会の見解に対する詳細なコメントは避けながらも、「Nature として、Science 誌が取り組んだ外部調査を歓迎したい。提言についても検討していきたい」と述べている。

しかし、この問題に関心を寄せる識者の多くは、同委員会による提言は不十分であると感じているようだ。「インパクトの高い論文や、議論をよびそうな論文だけでなく、初めからすべての論文を対象に厳格な基準を適用すべきです」とタフツ大学の免疫遺伝学者 Thereza Imanishi-Kari はいう。Imanishi-Kari は、1990 年代に自身の研究が米国政府による調査対象となり、研究者としてのキャリアをくじかれたという経験をもつ（後に彼女の名誉は回復された）。

Krimsky の意見も同様だ。「(論文をより精査していくことに) どんな悪影響があるというのか。研究者コミュニティに対する信頼性が低下する? 新手的なマッカーシズム? そういった意見にはくみしない」。Krimsky はまた、研究結果が極めて大きい商業的利益に絡むような論文について、基準を厳格に設け、一層の精査を受けるべきだという。

一方、ペンシルバニア大学生命倫理センター（フィラデルフィア）の Arthur Caplan 所長は、新たな基準を適用する範囲を、過去に不正行為があった分野の論文や、研究者の数が比較的小さいために不正を十分に発見できないような専門化の進んだ領域の論文にまで広げてはどうかという。さらに Caplan は、

「特定の国々から寄せられる論文に注意せよ、とはっきりいふべきだと思っている。中国はまだ十分に信用できないし、韓国にも問題がある」とも話す。

しかし Kennedy は記者会見で、特定の国の研究者を狙い打ちにすることには反対だと述べている。「私たちは、なにもプロファイリングを行いたいのではありません。韓国をはじめとする、科学の分野で成長著しい国々から寄せられる論文を、特に厳しくみようというのはまったく不公正です」。

1. Hwang, W. S. *et al. Science* **303**, 1669-1674 (2004).
2. Hwang, W. S. *et al. Science* **308**, 1777-1783 (2005).
3. Cyranoski, D. *Nature* **439**, 122-123 (2006).
4. Kennedy, D. *Science* **314**, 1353 (2006).
5. Deb, K., Sivaguru, M., Yong, H. Y. & Roberts, R. M. *Science* **311**, 992-996 (2006).

SNAPSHOT

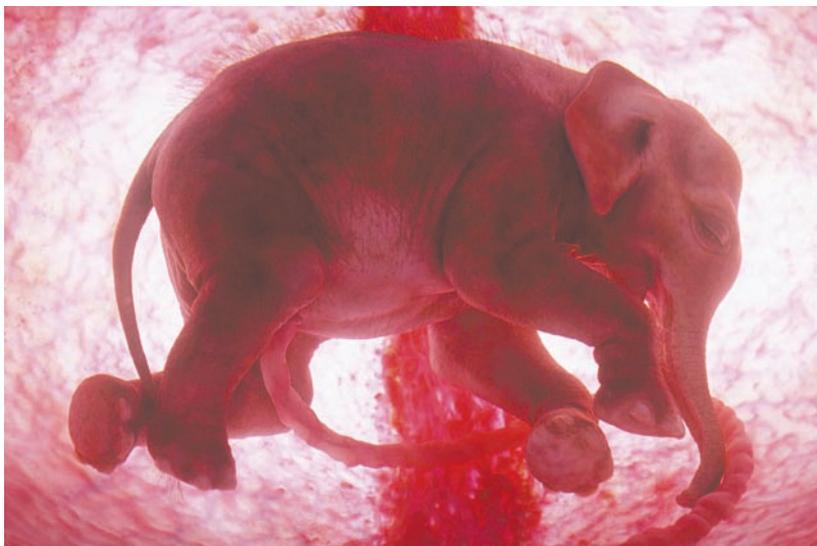
A womb with a view

胎内の眺め

Nature Vol.444(529)/30 November 2006

これは、見えざる世界の扉を開き、母なる大地ならぬ母なる胎内に息づく、ゾウ胎児の姿を捕らえた超音波スキャン画像である。画像は見やすいように CG で調整しており、写っているゾウ胎児は体重 75 kg で、すでに足蹠部（足の裏部分）や長い鼻ができてきている。

超音波検査技師たちは画像作成にあたって、ゾウ胎児に十分な距離まで接近するために、肩まで届く手袋を着用し、妊娠している母親ゾウに浣腸してから、直腸の奥まで超音波プローブを挿入した。このゾウ胎児はおよそ妊娠 19 か月目にあたり、妊娠 14 か月目の早期あたりから足を動かしたり蹴ったりし始めていたはずだ。あと 3 か月もす



れば出産となり、この子ゾウは外の世界に生まれ出てくる。

画像は、『In The Womb』（胎内）と題したドキュメンタリーの一部として撮影されたものである。このドキュメンタリーは、ゾウのほかイルカやイヌの胎内超音波映像を短編にまとめてあり、それぞれの最後は誕生場面の映像で締めくくられている。この番組は、米国や欧州ではナショナルジオグラ

フィックチャンネル、英国ではチャンネル 4 で 2006 年の末に放映された。

このドキュメンタリーでは進化の話題にも触れている。ゾウの胎児は妊娠 4 か月目に、淡水生の魚類やカエルにしか普通は見られないような腎臓の導管構造（腎口という）を一時的に発達させる。これは、ゾウの祖先が水生動物であったことを物語っている。

Narelle Towie